

# 研修報告書

平成 24 年 12 月 13 日

## 1. 目的

教育情報委員会主催、被災地視察研修会

## 2. 視察先

宮城県本吉郡南三陸町

人口：平成 24 年 11 月末現在 約 15,200 人

面積：163.74 km<sup>2</sup>

## 3. 日時及び行程

平成 24 年 11 月 9 日(金)～10 日(土)

## 4. 出席者

組合員 12 社 12 名 講師 1 名 事務局 2 名 計 15 名

## 5. 研修場所

南三陸町 ホテル観洋（宮城県本吉郡南三陸町黒崎 99-17） 1 階会議室「寿海」  
（ホテルの概要）

東日本大震災（H23.3.11）の際、津波の影響により海面が 15m 上昇し、ホテルの 2 階部分まで浸水、ガラス片等のがれきが建物内へ流れ込みホテルは大きな被害を受ける。また、水道・電気・ガスは止まり、ホテルへ向かう為の橋も崩壊するなどライフラインが遮断されホテルは完全に孤立し、長期休業を余儀なくされる。しかし津波により甚大な被害を受けた南三陸町に唯一残ったホテルとして、震災後すぐに避難者を受け入れ、ホテル宿泊者、従業員も併せた約 600 名へ衣食住を提供するなど、二次避難所としても開放した。4 カ月後の 7 月には、完全復旧ではない中、いち早く一部営業再開に踏み切り、現在は施設も完全復旧し、震災前の 7 割程度宿泊者が戻ってきているとのこと。

## 6. 内容

◎11 月 9 日（金）

(1) 「災害対策セミナー」 17:00～17:40

講師：(株)山口総研 代表取締役社長 山口泰信氏

2 日間の研修会の“導入編”として「実際に震災に直面した際、あなたは何をしますか」との問いかけから始まり、参加者は日頃からの災害に対する準備、心構え、知識等について“生き残る”為には何をすべきなのかを改めて考える時間となった。その後、翌日の視察箇所である南三陸町志津川地区に津波が襲った際の写真を基に、当時の現地状況について説明が行われた。

(2) 「講演会」 17:40～18:20

講師：ホテル観洋 女将 阿部憲子氏

震災当日、ホテル内で通常業務を行っていた際に地震が起こり、その後の津波により被災した。当時の現場では実際何が起こっていたのか等、経営者の立場から体験を基にした説明があった。

## [要約]

- ・震災によりライフラインが遮断され、被災地の孤立が起こった。この状況では必要な物資がすぐには届かないと判断し、直ぐにホテル内の食材を把握した。それを基に1週間分の献立をたてるよう料理長に指示を出し、宿泊者及び従業員、近隣からの避難者約350名の食料の確保を一番に行った。
- ・被災地では特に水不足が深刻な問題であり、避難者を守るべく水の確保のため給水車の手配、海水を真水に変える機械を借り受ける等、自ら精力的に情報収集を行う。混乱する国や行政を待っているだけでは現場に必要な情報、物資は届かないため、今回は情報収集手段のひとつとして、インターネット(Twitter-ツイッター)を有効活用することで、リアルタイムに情報を得ることができた。
- ・現在、地元の企業108社が廃業という事態の中、震災による人口流出は南三陸町の復興を遅らせ、町の衰退、さらには町の存続を揺るがしかねないことを非常に危惧し、まず町の会社経営者と子供達を残すことが重要と考え、優先的に宿泊先を提供した。またホテル内に子供が学べる環境を整え、ボランティアの大学生による「寺小屋」を開設。今年の8月で終了したが、現在はそろばん、英語教室等を無料で提供し復興支援を続けている。

◎11月10日(土)

(1)「脳呼吸法」9:00~9:30

講師：山口泰信氏

山口氏が推進する「呼吸法」を全員で体験した。

(2)「南三陸町視察」9:30~11:00

講師：山口泰信氏

宿泊・研修先であるホテル観洋から大型バスにて移動。

山口氏から各停車場所で被災された方々の体験談や、当時の被災状況と現在の復興程度について説明があった。

高野会館→志津川病院(跡地)→防災庁舎→ベイサイドマリーナ

(3)「講演会」11:10~12:00

講師：(株)阿部長商店 営業統括本部 気仙沼ブロック 復興準備室長

震災当日、気仙沼にある水産加工工場で作業中に大きな揺れに襲われる。津波とその後の火災により壊滅的な被害を受けた気仙沼で、震災直後から津波が襲ってくるまでにどのような判断を行ったのか、また現在の被災地で抱える問題等について説明があった。

## [要約]

- ・震災発生後、同氏は異常な地震であることから感覚的に津波がくると判断し、すぐに従業員を表に集合させ点呼・安否確認を行う。その後、渋滞が起これば車で高台までの移動は困難と判断し、津波が到達するまでに徒歩で全従業員55名を高台に避難させた。
- ・震災から1年8か月、復興は現在20%弱しか進んでいない。その原因の一つとして、国、県、町それぞれが担う責任の所在が明確ではないことから混乱が生じ、一向に復興が進まないこと、また時間の経過に伴って土地所有者による地

権問題、遺族による訴訟問題等もあらゆる場面で表面化しはじめるなど、問題がより複雑化していることも原因となっているとのこと。

- ・工場の再建に関して、今後のリスク回避のため高台に工場を再建することも選択肢の一つではあったが、水産業を成り立たせるためには水は絶対にかかせないことから海と共存する覚悟で海辺への再建を決定した。
- ・災害を目の当たりにして、自然の脅威に人間は無力である。自分の身に“災害は必ず来る”という意識を待つところから災害対策を考えていくことが重要であり、“経験をいかす、常日頃の準備、そして安心感・思い込みをなくす”ことが判断を分けるということ。

#### (4)「BCP（事業継続計画）講座」13：00～14：20

資料⑥を基にインターネットを使いながら断層マップ（J-SHIS）、津波のシュミレーション（NASA）等を行い、まず現在の「自分（自社）の防災力」を調べるところから始まり、その後企業におけるBCPの必要性と作成方法について説明があった。

講師：山口泰信氏

## 6. 所 感

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から1年8か月経過してからの訪問であった。すでに仙台空港内は整備されており、ここまで津波が押し寄せたことの実感が全くわからず、仙台空港から仙台駅（空港アクセス線）までの移動中、車窓から見える海沿いの家々が新築であることから、ここが津波で流された箇所であることにやっと気付くといった程度であった。また仙台市内にいたっては震災があったとは思えないほど普段通りで、活気のある街という印象を受けた。

しかし、二日目に南三陸町志津川地区を訪問したことでその認識は一変した。街一つが津波によって全て流された様子はテレビで見知っていたが、実際に自分の足で立ち、自分の目で見る街は360度視界を遮るものではなく、現在も、高台にある津波を免れた数件の家を残し、がれきの山と壊れた建物が数件あるのみで、そこに街があったと証明できるものは残された家の基礎のみであった。この震災で南三陸町は70～80センチ地盤沈下したとのことだが、復興の目途はいまだに立っておらず、1年8か月の時間の経過の中で全く復興が進んでいない現状を見せつけられ、大変な驚きと憤りを感じた。

講演会では経営者と従業員各々の立場から当時の緊迫した状況を伺うことができた。その中で「一度、災害が発生すると、国・県・町など行政自体にも大きな混乱が生じてしまうことから、被災地に必要な物資、正確な情報が入らず被災地が孤立する。その状況の中、現場ではマニュアルだけでは難しい判断が求められてくることもあるが、その判断は社員の命にも関わる大きな人災に繋がる危険性を含み、その責任と判断の重さに非常に悩んだ。」とのお話は想像を絶し言葉を失った。

また三陸地方では、地震が起こった際に“つなみてんでんこ”（津波が来たら他人に構わずそれぞれ必死に逃げよ、自分の命は自分で守れ）という言葉が伝わっているが、昭和35年のチリ地震を体験していても、まさか自分が災害に遭遇するとは思わなかったという。そこから今回の災害を絶対に風化してはいけないということ、そして1000年に一度の学びの機会としてわが身に置き換えてそれぞれが学んで欲しいというメッセージを頂いた。最後に、「私達は日常を取り戻したい。それを切として願っている。」という女将・阿部憲子氏の言葉が非常に印象的であった。

困難な状況でも地域のために見返りを求めず行動したことが地域の貢献につながり、そこから「ホテル観洋の復興なくして南三陸町の復興はありえない」と言われるほどの信頼につながり、こうした地域との信頼関係をつくることの重要性を改めて認識した。復興するためにはまず国、県、町がそれぞれの役割を発揮することが重要であるが、「我が町を潰せない」その使命感が被災地の復興の原動力、そしてバイタリティになっていると感じた。

今回の研修会から学ぶべきことは、災害時に如何に早く情報を得られるかが重要なポイントであることから、日頃から密に地域、行政とのコミュニケーションをとり、情報の共有を図るなど、行政との良好な関係を構築し継続していくこと、また、協同組合としての危機管理を含めたBCPの構築に今後取り組むべき必要性があると強く感じた。

以上